

きょうだい関係と性格

— 3. 文献による検討 —

A Study on the Sibling Relations and personality

— 3. Investigation by literature —

白 佐 俊 憲

Toshinori SHIRASA

I は じ め に

この報告は、「きょうだい関係と性格」というテーマのもとに、「きょうだい関係（出生位置・出生順位など）の影響は発達段階のどの段階まで継続するか」を調べている研究の第3報である。

わが国で発表された「きょうだい関係と性格」に関する文献（著書・論文・学会発表）の主要なものは第1・2報の末尾に示したが、最近もこの報告の文献欄にあげるようなもの³⁾⁻⁵⁾が報告されており、これまでに実証的な研究が数多くなされている。

これまでの多くの研究によると、きょうだい関係と性格との間にはかなり明確な関連が存在し、例えば、長子的性格、中間子的性格、末っ子的性格などと呼ばれる性格特性があるとされる。そして、幼少期に限らず、成人期に達してもきょうだい関係の影響と言える性格・行動傾向を示す、と判断されている。この見方に従えば、幼少期で認められたきょうだい関係と性格特徴との関連は成人になっても残存するのであるから、その関連は、成人に至るまでの発達段階のどの時期でも何らかの形で認められるはずである。そして、その関連性は、様々な方法によってとらえられるであろうが、心理学的な検査・調査の結果にも何らかの差異となって表れると考えられる。

この仮説を実証するために、筆者は、発達段階の上で青年後期に達した者（女子短大生）を対象とし、第1報ではYG検査結果に基づき、第2報では自己評定法の調査結果に基づき、きょうだい関係の違いによって青年の性格に差異が見られるかどうか、また、見られるとすれば、どのような差異が見られるかを多面的・実証的に検討した。

この結果、きょうだいの出生位置・数・出生順位・性別構成の違いによる性格の差異は、ほとんど見いだされなかった。出生位置の違いなどでは、統計的な有意差はかなりの項目で認められたのであるが、前後して実施した2回の結果の間には一貫性がほとんど認められず、交差妥当性（普遍妥当性）は確認されなかった。

このように、筆者の研究結果では、従来の主要研究の成果とはかなり違った結果を得たのであるが、きょうだい関係の違いによる性格の差異がほとんど見いだされなかった研究は、ほか

にはないのであろうか。過去の研究で、以前の研究の結果を確認するために追試的に行われたものでは、果たして本当に同じような結果が得られているのであろうか。矛盾する結果だったものはないのであろうか。

本研究は、これらの疑問を解き明かすために、わが国で行われた過去の実証的研究の結果を再検討するものである。ただし、誌面の分量制限のため、筆者が行なった文献調査で、同類の研究が三つ以上あった主要研究に限らざるを得ない。このことを最初に断っておく。

II 依田明を中心とした長子的性格・次子的性格の研究

1. 依田・深津の先駆的研究

「きょうだい関係と性格」を取り上げた代表的な研究は、横浜国立大学の依田明を中心としたものである。依田明・深津千賀子の先駆的研究⁶⁾⁷⁾から、実証的研究の成果を確認してみる。

依田・深津は、1962年、小学4年から中学2年までに在学中の2人きょうだいの男女児童・生徒145人とその母親145人（いずれも有効回答の人数）を対象に、51項目の質問紙を用いて、長子と次子の性格特性を調査した。性格特性を調査する質問項目は、三木・木村⁸⁾、三木・天羽⁹⁾が双生児の兄的性格・弟的性格の研究で使用したものを参考に作成したもので、日常生活場面でよくみられる行動の記述を示し、きょうだいのどちらによりあてはまるかという相対的判断を求めるものである。質問は、例えば、子供には「あなたと、あなたのきょうだいをくらべてみて、『おしゃべり』なのは、ふたりのうちどちらですか」と聞き、母親には「あなたのふたりの子どもをくらべてみて、『おしゃべり』なのは、ふたりのうちどちらですか」と聞く方法を採用した。回答方法は、子どもは「自分」か「きょうだい」かを答え、母親は「上の子」か「下の子」かを答えるものである。得られた親子の回答を整理し、矛盾する反応の項目などを除き、親子の反応を合計し、統計的に有意な差を示した項目を選び出した。

その結果、長子的性格を表すものとして8項目、次子的性格を表すものとして13項目が得られた。これらの項目内容を検定値の多い順に示すと、次のとおりである。なお、項目の前の数字は、調査用紙での配列番号である。

A. 長子的性格を表す項目（8）

9. あまりしゃべらないで、人の話を聞いていることの方が多い。
49. なにかするときに、人のめいわくになるかどうかをよく考える。
33. めんどいなことは、なるべくしないようにする。
7. もっと遊んでいたいときでも、やめねばならないときにはすぐやめる。
29. 仕事をするとき、ていねいに、失敗のないようにする。
48. 人の前に出たりするのをきらう。
51. 人に親切にしてあげることが多い。
39. 気にいらないとすぐだまりこむ。

B. 次子的性格を表す項目（13）

- 30. お母さんにいつも甘ったれている。
- 6. お父さんにいつも甘ったれている。
- 36. 外に出て遊んだりさわいだりするのが好きである。
- 28. 人におだてられると、すぐ調子にのりやすい。
- 4. おしゃべりである。
- 22. 人のまねをするのがじょうずである。
- 10. お母さんにつげ口する。
- 41. お父さんにつげ口する。
- 34. とてもやきもちやきである。
- 20. 少しでもこまることがあると、人にたよろうとする。
- 40. すぐ「ぼく（わたし）知っているよ」などと知ったかぶりをする。
- 12. むりにでも、自分の考えをとおそうとする。
- 24. 食事に好ききらいがはげしい。

この結果について、依田らは、次のようにまとめている。「特徴的な性格として長子には、自制的、慎重、ひかえめ、親切などがあり、次子には、多弁、あまったれ、強情、依存的、嫉妬、快活などがある。長子と次子の性格の間にこのような一般的な差異が見いだされたことは、出生順位によって性格形成の条件が非常に異なったものになっていることを示している」。

2. 依田・飯嶋の追試的研究

依田明・飯嶋¹⁰⁾¹¹⁾一恵は、1980年、小学5年に在学中の2人きょうだいの男女児童187人とその母親187人（いずれも有効回答の人数）を対象に、依田明・深津千賀子の先駆的研究と同一の51項目の質問紙を用いて、長子と次子の性格特性を再調査した。

先駆的研究と同様な方法で整理した結果、長子の性格を表すものとして10項目、次子の性格を表すものとして15項目が得られた。これらの項目内容を検定値の多い順に示すと、次のとおりである。なお、項目の前の数字は、先駆的研究と同様に調査用紙での配列番号である。

A. 長子的性格を表す項目（10）

- 49. 何かする時に、人の迷惑になるかどうかをよく考える。（依田・深津と一致）
- 21. 欲しいものでも、遠慮してしまう。（本研究）
 - 1. 自分の用事を平気で人に押しついたり、頼んだりする。（本研究）
 - 9. あまりしゃべらないで、人の話を聞いていることの方が多い。（依田・深津と一致）
- 35. お母さんによく口ごたえする。（本研究）
- 33. 面倒なことは、なるべくしないようにする。（依田・深津と一致）
- 7. もっと遊んでいたい時でも、やめねばならない時にはすぐやめる。（依田・深津と一致）
- 29. 仕事をする時、ていねいに失敗のないようにする。（依田・深津と一致）
- 14. いつもきちんとしていないと、気がすまない。（本研究）
- 43. よそへ行くと、すましやさんになる。（本研究）

B. 次子的性格を表す項目 (15)

- 30. お母さんにいつも甘ったれている。(依田・深津と一致)
- 6. お父さんにいつも甘ったれている。(依田・深津と一致)
- 10. お母さんに告げ口する。(依田・深津と一致)
- 28. 人にほめられたりすると、すぐに調子に乗ってしまう。(依田・深津と一致)
- 41. お父さんに告げ口する。(依田・深津と一致)
- 34. とてもやきもちやきである。(依田・深津と一致)
- 4. おしゃべりである。(依田・深津と一致)
- 36. 外へ出て遊んだり、騒いだりする。(依田・深津と一致)
- 22. 人のまねをするのがじょうずである。(依田・深津と一致)
- 40. すぐ、「ぼく(私)知っている」などと言って、何でも知っているふりをする。(依田・深津と一致)
- 12. 無理にでも、自分の考えを通そうとする。(依田・深津と一致)
- 24. 食べ物に好き嫌いがたくさんある。(依田・深津と一致)
- 20. 少しでも困ることがあると、人に頼ろうとする。(依田・深津と一致)
- 2. せっかちである。(本研究)
- 16. はきはきして、ほがらかである。(本研究)

これらの結果については、次のようにまとめることができる。長子に特徴的な性格としては、面倒なことが嫌いで、困難な事柄に対しての取り組み方が消極的で、利己的な面がみられる。その反面、仕事をていねいにやり、きちょうめんなところがあり、ひかえめで、自分からしゃべるよりも聞き手の側にまわり、ませたところがある。依田・深津の研究と比較すると、遠慮、母に反抗、すましやなどの項目も新たに加わり、大人びて、気むずかしいといった面も強調されている。依田・深津の結果との比較では、依田・深津の結果で長子的性格とされていた8項目のうち、5項目(配列番号9, 49, 33, 7, 29)は同様に有意差が認められたが、3項目(48, 51, 39)では有意差が認められなかった。また、依田・深津の研究では有意差が認められなかったものでも、5項目(21, 1, 35, 14, 43)で有意差が認められた。

次子においては、両親に甘えるという傾向が際立っており、依存的である。それに伴い、両親に告げ口をするというような、いわゆる「いい子ちゃんぶった」ところもみられる。また、強情であったり、やきもちやきな、激しい気性の面があり、わがままである。そして、外で遊ぶことが好きで、外向的である。依田・深津の研究と比較すると、明朗、せっかち、などが加わり、積極的で活動的な面がはっきりしている。依田・深津の結果で、次子的性格とされていた13項目は、矛盾なくすべて有意差が認められた。依田・深津の研究では有意差がみとめられなかったものでも、この研究で2項目(2, 16)で有意差が認められた。

依田・深津の研究結果と今回の結果を総合して、依田・飯嶋は、「長子的性格・次子的性格の存在は、非常に明確に検証された。しかも、1963年調査時の結果と比較して、ほとんど変化

がみられず、固定化したものと言える」と結論づけている。

3. 浜崎・依田の追試的研究

浜崎信行・依田明¹³⁾は、研究の対象を3人きょうだいに広げ、1984年、小学4年から中学2年までに在学中の3人きょうだいの男女児童・生徒525人とその母親525人（いずれも有効回答の人数）を対象に、依田明・深津千賀子の先駆的研究と同一の51項目の質問紙を用いて、長子・中間子・末子の性格特性を調査した。

先駆的研究と同様な方法で整理した結果、長子的性格を表すものとして6項目、中間子的性格を表すものとして3項目、末子の性格を表すものとして9項目が得られた。これらの項目内容を検定値の多い順に示すと、次のとおりである。なお、項目の前の数字は、これまでと同様に調査用紙での配列番号である。

A. 長子的性格を表す項目（6）

1. 自分の用事を平気で人に押しつけたり、頼んだりする。(依田・飯嶋と一致)
49. 何かする時に、人の迷惑になるかどうかをよく考える。(前記2研究と一致)
29. 仕事をする時、ていねいに失敗のないようにする。(前記2研究と一致)
33. 面倒なことは、なるべくしないようにする。(前記2研究と一致)
21. 欲しいものでも、遠慮してしまう。(依田・飯嶋と一致)
38. お父さんによくしかられる。(本研究)

B. 中間子的性格を表す項目（3）

39. 気に入らないと、すぐに黙りこむ。(依田・深津では長子的性格)
5. よく考えないうちに仕事をはじめて、失敗することが多い。
18. 面倒がらないで、仕事を一生懸命にする。

C. 末子的性格を表す項目（9）

30. お母さんにいつも甘ったれている。(前記2研究と一致)
6. お父さんにいつも甘ったれている。(前記2研究と一致)
41. お父さんに告げ口する。(前記2研究と一致)
10. お母さんに告げ口する。(前記2研究と一致)
36. 外へ出て遊んだり、騒いだりする。(前記2研究と一致)
34. とてもやきもちやきである。(前記2研究と一致)
28. 人にほめられたりすると、すぐにお調子に乗ってしまう。(前記2研究と一致)
40. すぐ、「ぼく(私)知っている」などと言って、何でも知っているふりをする。(前記2研究と一致)
20. 少しでも困ることがあると、人に頼ろうとする。(前記2研究と一致)

長子的性格6項目のうち、3項目(配列番号49, 29, 33)は前記2研究の結果と、2項目(1, 21)は依田・飯嶋の結果と一致している。前記2研究の結果では有意差が認められず、この研究ではじめて長子的性格とされたのは1項目(38)だけである。しかし、前記2研究で長子的

性格としてあげられたもので、この研究では有意差が認められなかったものも2項目(9, 7)ある。依田・深津の研究で長子的性格としてあげられたもので、この研究では有意差が認められなかったものは3項目(48, 51, 39)であり、依田・飯嶋の研究で長子的性格としてあげられたもので、この研究では有意差が認められなかったものは3項目(35, 14, 43)である。

一方、末子的性格の9項目は、すべて前記2研究の次子的性格の結果と一致している。しかし、前記2研究で次子的性格としてあげられたもので、この研究では有意差が認められなかったものも4項目(4, 22, 12, 24)ある。

これらの結果について、浜崎・依田は、「長子的性格、末子的性格は、きょうだいがふたりであっても3人であっても明瞭に存在している」と述べている。

なお、中間子的性格は、3項目しか見いだせなかったのであるが、長子や末子に比べると、中間子の存在が多様であり、あまりはっきりしない、と浜崎・依田は述べている。項目39の「気に入らないと、すぐに黙りこむ」は、依田・深津の研究では長子的性格とされたものであったように、中間子は「性格的には末子よりも長子と共通点が多いことが明らかになった」とされる。

4. 長谷川ら及び橋本らの追試的研究

長谷川さくら・堀籠千秋・保川麻紀¹³⁾は、1991年、短期大学の女子学生551人を対象者として、きょうだい関係の調査を実施しているが、その中で、2人きょうだいの者314人(姉176人, 妹138人)については、文献であげられている性格特徴を確認するための調査を実施している。依田・深津の研究結果については、長子的性格を表すとされた8項目、次子的性格を表すとされた11項目(13項目中、6と30, 10と41を併合)を取り上げ、同一項目を使って質問紙を作成し、2人きょうだいに自己評定を求めた。

その結果、姉群と妹群との間で統計的に有意な差が認められたのは、1項目だけであった。それは、次子的性格に該当する項目番号22(「人の真似をするのが上手である」)であるが、妹群は姉群よりも人真似が上手であることを確認した。

結論として、両群とも基本的にはほぼ一致した選択傾向であり、総合的にみて、長子的性格・次子的性格と言えるほどの差は得られなかった、と長谷川らは述べている。

さらに、長谷川らは、3人以上のきょうだいや一人っ子を含めて、きょうだい数別比較、出生位置別比較も行なっているが、結論として、「性格が違ってというより、むしろ良く一致していると言ってよいようだ」と述べている。

長谷川らの研究結果を同一方法で確認しようとした研究がある。橋本みゆき・松本いづみ・菟口佳枝¹⁴⁾は、長谷川らと同じ短期大学の女子学生351人を対象者として、長谷川らと同一方法できょうだい関係の調査を実施し(実施年は不明)、1994年、その結果を報告している。しかし、結果の整理が、1991年との比較に重点を置いており、各種項目を一括処理しているため、長子的性格8項目、次子的性格11項目を抜き出して検討できるようになっていない。したがって、ここでは、橋本らの論文の「まとめ」の一部を紹介するにとどめざるを得ない。

「われわれは、兄弟位置によっては性格の違いはないという91年度の研究をふまえて、調査を進めてきた。今回調査の本人については91年とほぼ同じ結果が得られた。自己評価に関しては、兄弟位置による性格の違いは認められなかった。しかも性格特徴によらず、ばらばらな選択の結果、差が見られないということではない。どんな兄弟位置にあっても特定の性格特徴については共通に高かったり、別の特徴については共通に低かったりというように、積極的な意味で、どのような兄弟位置にあっても共通の性格傾向が示されたと言っても良いようだ」。

5. 岩井・松井の追試的研究

岩井勇児・松井直美¹⁵⁾¹⁶⁾は、1991年、依田・深津の研究で使われた項目などを集めた、兄姉的性格・弟妹的性格を表す46項目の調査用紙を作成し、同じ中学校に在学している2人きょうだいの生徒を対象に調査を実施した。その結果、209組（兄弟48組、兄妹58組、姉弟55組、姉妹48組）から有効回答を得た。前記1・2の研究の結果と比較するために、全体を合算して有意な差がみとめられた項目を選択率の高いほうから整理して示すと、次のようになる。（項目の前の数字は、前記1・2の研究の調査用紙での配列番号である。岩井・松井の研究では、質問項目の配列番号も表現も、前記1・2の研究とは違っているものがある）

A. 兄姉的性格を表す項目（7）

- 9. あまりしゃべらないで、人の話を聞いていることの方が多い。（前記1・2の研究と一致）
- 1. 自分の用事を平気で人に押し付けたり、頼んだりする。（依田・飯嶋と一致）
- 21. 欲しいものでも、がまんする。（依田・飯嶋と一致）
- 人によく頼りにされる。（本研究。この研究ではじめて採用した項目）
- 7. もっと遊んでいたい時でも、やめねばならない時にはすぐやめる。（前記1・2の研究と一致）
- 33. めんどうなことは、なるべくしないようにする。（前記1・2の研究と一致）
- 49. 何かする時に、人の迷惑になるかどうかをよく考える。（前記1・2の研究と一致）

B. 弟妹的性格を表す項目（8）

- 36. 外へ出て遊んだり、騒いだりする。（前記1・2の研究と一致）
- 39. 気にいらないとすぐ黙り込む。（依田・深津と矛盾。依田・深津では長子的性格）
- 28. 人にほめられたりすると、すぐにお調子に乗ってしまう。（前記1・2の研究と一致）
- 6. お父さんにいつも甘ったれている。（前記1・2の研究と一致）
- 34. とてもやきもちやきである。（前記1・2の研究と一致）
- 10. お母さんに告げ口する。（前記1・2の研究と一致）
- 20. 少しでも困ることがあると、人に頼ろうとする。（前記1・2の研究と一致）
- 30. お母さんにいつも甘ったれている。（前記1・2の研究と一致）

岩井・松井は、この結果を、依田・深津の研究結果と比較して論議している。兄姉的性格を表す項目とみなせるのは7項目で、依田・深津の結果と比較すると、4項目（配列番号9, 7, 33, 49）は一致した（同時に、依田・飯嶋の結果とも一致する）が、2項目（1, 21）は一致

しなかった（ただし、依田・飯嶋の結果とは一致する）。もう1項目（○印）は、この研究で独自に採用した質問項目である。しかし、依田・深津の研究結果と一致した項目でも、兄一弟、兄一妹、姉一弟、姉一妹のどの性別の組み合わせをみても、必ず有意差がある項目はなかった。また、依田・深津の結果で、長子的性格とされていたものでも、この研究では、3項目（29, 48, 51）で有意差が認められず、1項目（39）は弟妹的性格とされた。なお、依田・飯嶋の研究結果で、長子的性格とされていたもので、この研究で有意差が認められなかったのは、4項目（35, 29, 14, 43）である。

弟妹的性格を表す項目とみなせるのは8項目で、依田・深津の結果と比較すると、7項目（36, 28, 6, 34, 10, 20, 30）は一致した（同時に、依田・飯嶋の結果とも一致する）が、1項目（39）は一致しなかった。一致しなかった1項目は、依田・深津の結果では長子的性格にあげられていたものである。一致した項目でも、兄一弟、兄一妹、姉一弟、姉一妹のどの性別の組み合わせをみても、必ず有意差があるのは1項目（30）だけであった。また、依田・深津の結果で、次子的性格とされていたものでも、この研究では、6項目（4, 22, 41, 40, 12, 24）では有意差が認められなかった。なお、依田・飯嶋の研究結果で、次子的性格とされていたもので、この研究で有意差が認められなかったのは、8項目（41, 4, 22, 40, 12, 24, 2, 16）である（ただし、項目22は、この研究では調査項目に入っていない）。

この結果を基に、岩井勇児は、長子的性格・次子的性格の存在に疑問を投げかけているが、さらに、1995年の続報論文⁵¹⁷⁾の中で、依田・深津及び依田・飯嶋の研究について、いくつかの問題点・疑問点を指摘している。

その第一は、性格の定義が明確でなく、性格として取り上げた調査項目には、気質的なものから役割行動的なものまで、雑多なものが含まれていることである。

第二は、研究方法上の問題・疑問であるが、次の4点をあげている。

① 長子的性格、次子的性格とまとめることに疑問がある。兄弟、兄妹、姉弟、姉妹といった性別の組み合わせによって、上の子と下の子の性格の違いは異なるのではないか。

② きょうだいのペア（兄弟、兄妹、姉弟、姉妹）の回答を得ているのだから、妥当性の検討を含めて、ペア回答を分析の単位にすべきではないか。

③ 長子的性格か次子的性格かを決めるのに、きょうだいの回答及び母親の回答を合計した度数を使用している。しかし、きょうだいはその相対的立場によって回答を考えるのだから、きょうだいの回答を独立なものとして扱うのは問題である。また当事者であるきょうだいの回答と部外者である母親の回答をすべて独立に扱い、その回答を単純に合計する根拠もよくわからない。

④ 結果として、 χ^2 検定における χ^2 の数値のみ示されていて、長子的回答及び次子的回答の比率が示されていない。ふつう、研究の結果は、度数、パーセント、平均値で示されるのであって、検定は結果の解釈の手段に過ぎない。

また、岩井は、自分の1991年の研究報告に対して、依田・深津の比較の仕方をそのまま踏襲

したことには、かなり問題があるとの判断を下している。すなわち、結果の数値をパーセントで示したものの、数値の大きさを問題とせず、相対的比較をした点で誤りを犯した、との反省を述べている。そこで、岩井は、得られた結果の数値の大きさを問題にし、兄姉・弟妹のどちらかの特性項目とするには、少なくとも一方が50%以上選択されたことを基準にすべきであるとの考え方に立ち、先の研究結果を再整理して検討し、その結果を報告している。

この結果について、岩井は、「きょうだいのペアを回答の単位として、きょうだいのいずれかの度数が50%以上あることを長子的性格、次子的性格の判断基準とすると、長子的性格、次子的性格と判断できるような項目は、見られなかった」と述べている。そして、「本資料は一事例に過ぎないから、ここから直ちに長子的性格、次子的性格は一般化できないと結論づけるつもりはないが、長子的性格、次子的性格には大いに疑問があることを強調しておきたい」と結んでいる。

Ⅲ 詫摩武俊を中心とした長子的特徴・次子的特徴の研究

1. 詫摩らの先駆的研究

詫摩武俊¹⁸⁾は、1970年発行の自著の単行本の中で、中学3年生から大学4年生までの2人きょうだい（年齢差4歳以内）を対象に行なった性格・行動特徴に関する調査（学習院大学の伊田真理子の卒業論文であるとのことであるが、論文名をはじめ、調査の実施年等は書かれていない）を報告している。調査の対象者（集計で使用した数）は、104組（兄・弟31組、兄・妹19組、姉・弟17組、姉・妹37組）で、いずれも東京都及びその近県に居住する中流以上の家庭の子どもである。ほとんどが共通の私立学校に通学している。平均年齢は、長子が18.8歳で、次子が16.6歳である。

調査の方法は、質問紙法（郵送法による）で行い、「意志が強いのはどちらか」「人を導いていくのがすぐれているのはどちらか」などの性格・行動特徴を表す質問を36項目用意し、本人には「自分、相手、どちらともいえない」の回答の中からあてはまるものを選んでもらう形式をとっている。同じ質問を親にも尋ね、その傾向の著しいのは「上の子である、下の子である、どちらともいえない」の中から選んで答えてもらった。結果は、長子・次子・親の3者が一致して、それは長子的特徴であると判定したものを「長子的特徴」とし、3者が一致して、それは次子的特徴であると判定したものを「次子的特徴」とした。ただし、2人が一致し、1人がどちらともいえないと答えたものも含めている。

結果の処理方法、結果の具体的な数値、検定方法などについては、この単行本の中でも、後にこの結果を紹介している詫摩の単行本などの中でも示されていないので、詳細は不明であるが、結果はおおよそ次のようなものであった。

A. 長子的特徴（3）

- ・指導力がある。 ・異性に関心がある。 ・金使いがあらう。

B. 次子的特徴（6）

- ・依頼心が強い。 ・反抗的。 ・活動的。
- ・生活が規則正しい。 ・人前に入るのをきらう。 ・甘ったれ。

これらの特徴は、詫摩も述べているように、長子の対象者には大学生が多く、次子の対象者には高校生・中学生が多いという点を考慮すると、出生順位というよりは発達段階や年齢によると考えたほうがよいものも認められる。例えば、長子が「金使いがあらいい」というのは、それだけお小遣いをもらったり、アルバイトで得ているからであろう。また、次子が「生活が規則正しい」というのは、高校生や中学生であるため、学校の束縛が強いためと解釈できよう。これでは、あまりにも漠然としているということから、詫摩は、さらに詳しい資料の検討を行い、次のような特徴をあげている。

A. 兄の特徴——下が弟のとき——(0)

- ・特にはっきりした特徴なし。

B. 兄の特徴——下が妹のとき——(5)

- ・指導力がある。 ・責任感が強い。 ・人あたりがいい。 ・金使いがあらいい。
- ・異性に関心がある。

C. 姉の特徴——下が弟のとき——(10)

- ・意志が強い。 ・指導力がある。 ・責任感が強い。 ・おしゃれ。
- ・負けずぎらい。 ・親によく叱られる。 ・世話好き。 ・ものごとをやり通す。
- ・不平が多い。 ・涙もろい。

D. 姉の特徴——下が妹のとき——(4)

- ・指導力がある。 ・異性に関心がある。 ・人あたりがいい。 ・金使いがあらいい。

E. 弟の特徴——上が兄のとき——(7)

- ・依頼心が強い。 ・反抗的。 ・活動的。 ・負けずぎらい。
- ・人前に入るのをきらう。 ・甘ったれ。 ・不平が多い。

F. 弟の特徴——上が姉のとき——(3)

- ・めんどうなことはしない。 ・要領がいい。 ・人前に入るのをきらう。

G. 妹の特徴——上が兄のとき——(7)

- ・決断力がない。 ・依頼心が強い。 ・負けずぎらい。 ・生活が規則正しい。
- ・甘ったれ。 ・のんき。 ・父親と親しい。

H. 妹の特徴——上が姉のとき——(6)

- ・反抗的。 ・活動的。 ・要領がいい。 ・生活が規則正しい。
- ・人の好ききらいがはげしい。 ・甘ったれ。

これらを長子的性格特徴・次子的性格特徴というには、長子も次子も同一年齢、同一発達段階の者を対象者とした調査で、違いを確認する必要がある。

2. 長谷川ら及び橋本らの追試的研究

ここにあげる長谷川ら及び橋本らの研究というのは、先にⅡの4で紹介したものと同一の研

究で行われた別の調査項目の結果についてである。したがって、調査の対象者などは一致する。誌面の節約の意味で、重複部分は省略する。

長谷川さくら・堀籠千秋・保川麻紀¹³⁾は、文献であげられている性格特徴を確認するための調査を実施しているが、詫摩らの研究結果については、長子（兄・姉）的特徴を表すとされた13項目、次子（弟・妹）的特徴を表すとされた12項目を取り上げ、同様な表現の項目を使って質問紙を作成し、2人きょうだいに自己評定を求めた。

姉群と妹群との間で有意な差が認められたのは4項目で、①姉は妹よりも責任感が強い、②姉は妹よりも活動的である、③姉は妹よりも指導力がある、④姉は妹よりも人の好き嫌いが激しい、という結果が得られた。詫摩らの結果と比較すると、②と④は相反する結果である。この調査は、長子も次子も同一年齢、同一発達段階の者を対象者とした場合であるが、総合的にみて、長子的特徴・次子的特徴と言えるほどのものは確認できなかった、といえよう。

さらに、長谷川らは、3人以上のきょうだいや一人っ子を含めて、きょうだい数別比較、出生位置別比較も行なっているが、結論として、「性格が違っているというより、むしろ良く一致していると言ってよいようだ」と述べている。

また、長谷川らの研究結果を同一方法で確認しようとした橋本みゆき・松本いづみ・蓑口佳枝¹⁴⁾の研究については、Ⅱの4の説明がそっくりここでもあてはまる。

3. 白佐の追試的研究

白佐俊憲²⁾（筆者）は、女子短大生を対象に、1992年と1993年の2回、別々の対象者に性格・行動を記述した94の短文を呈示し、自己評定法によって回答を求めた。そして、きょうだい関係によって結果に違いがあるかどうかを、いくつかの観点から調べた。対象者数（有効数）は、1992年調査が1051名、1993年調査が1065名であった。

呈示した94の短文の中には、「指導力がある」「活動的である」など、詫摩らの研究結果を参考に加えたものが20ほどある。ここでは、これらの項目に限定して、また、2人きょうだいの結果についてだけ、再整理して紹介する。分析対象者の内訳は、1992年調査では姉群が308名、妹群が314名、1993年調査では姉群が349名、妹群が302名である。

その結果、2回の調査ともに姉群と妹群との間で有意な差があったのは、「甘ったれである」「のんきである」の二つであった。「甘ったれである」は妹群のほうが多く、「のんきである」は姉群のほうが多かった。しかし、「のんきである」というのは、詫摩らの研究結果では、妹の特徴とされており、矛盾する結果である。したがって、詫摩らの研究と同じ結果が得られたのはわずかに一つにすぎない。この調査も、長子も次子も同一年齢、同一発達段階の者を対象者とした場合であるが、やはり長子的特徴・次子的特徴と言えるほどのものは確認できなかった、といえよう。

Ⅳ 詫摩武俊を中心とした性格の自己認知に関する研究

1. 詫摩らの先駆的研究

ここにあげる詫摩らの先駆的研究というのは、先にⅢの1で紹介したものと同一の研究で行われた別の調査結果についてである。したがって、調査の対象者などは一致する。誌面の節約の意味で、重複部分は省略する。

詫摩武俊⁹⁾は、先に紹介した1970年発行の単行本の中で、「性格の自己認知」に関する調査についても報告している。

性格の自己認知とは、「自分で自分の性格をどう把握しているか」ということである。調査は、60項目の性格特徴を表す言葉を用い、質問紙法（郵送法による）で行なった。60項目の内訳は、A系列（好ましい特徴、「意志が強い」など20項目）、B系列（好ましいとも好ましくないともいえない特徴、「愛想がいい」など20項目）、C系列（好ましくない特徴、「あきっぱい」など20項目）の3系列である。回答は、自分にあてはまるものを各系列から5項目ずつ選んでもらう方法をとった。

結果の処理方法、結果の具体的な数値、検定方法などについては、この単行本の中でも、後にこの結果を紹介している詫摩の単行本などの中でも示されていないので、詳細は不明であるが、結果は概略次のようなものであった。

大ざっぱに長子と次子とに分けた場合、長子が自分にあてはまる項目であると判定することの多かったのは6項目で、A系列では「誠実」「責任感がある」の2項目、B系列では「ていねい」「世話好き」「融通性がない」の3項目、C系列では「自分本位」の1項目であった。一方、次子を選ぶことの多かったのは4項目で、A系列では「独創的」「明るい」の2項目、B系列では「甘ったれ」の1項目、C系列では「要領がいい」の1項目であった。

さらに、兄・弟・姉・妹のそれぞれについて、自己認知の一般的な特徴をみってみる。兄の場合は、一般として「責任感がある」「バカ正直」「気が散りやすい」「嫉妬深い」であり、下に妹がいる場合には、さらに「誠実」「自分本位」という項目を自分の特徴として認めている。姉の場合は、「明るい」「責任感がある」「愛想がいい」「ていねい」「無造作」「融通性がない」「みえっぱり」「自分本位」というものである。弟の場合は、あまりはっきりせず、「甘ったれ」「のん気」という程度であり、上に姉のいる者は、上に兄のいる者に比べて、自分自身を「神経質」で、「要領がいい」とみていることが多い。妹の場合は、「甘ったれ」「子どもっぽい」「要領がいい」というもので、上に兄がいる場合はさらに「明るく」「あきっぱい」という開放的でやや無責任な面が加わってくる。

2. 長谷川ら及び橋本らの追試的研究

ここにあげる長谷川ら及び橋本らの研究というのは、先にⅡの4で紹介したものと同一の研究で行われた別の調査項目の結果についてである。したがって、調査の対象者などは一致する。誌面の節約の意味で、重複部分は省略する。

長谷川さくら・堀籠千秋・保川麻紀¹³⁾は、文献であげられている性格特徴を確認するための調査を実施しているが、詫摩らの研究結果については、詫摩の調査と同一の60項目を使った質問紙を作成し、2人きょうだいの性格の自己認知を調べた。

その結果、統計的に有意な差が認められ、それが特徴であるといえるのは、A系列（好ましい特徴）では、姉群は1項目（「責任感がある」）で、妹群はなしであった。B系列（どちらとも言えない）では、姉群は1項目（「感傷的である」）で、妹群は1項目（「屈屈っぽい」）であった。C系列（好ましくない特徴）では、姉群はなく、妹群は1項目（「無責任である」）であった。

これらの結果を詫摩の先駆的研究の結果と比較してみると、一致しているのは、姉群では1項目（「責任感がある」）で、妹群では1項目（「無責任である」）であった。

さらに、各系列について、選択率の高かった上位3項目ずつ書き出してみたところ、A系列では、姉群は「明るい」「慎重」「誰とでも気軽につき合える」の順であり、妹群は「明るい」「穏やかである」「思いやりがある」の順であった。B系列では、姉群も妹群も同じ結果で、「のんき」「ものごとを思いつめる」「愛想が良い」の順であった。C系列では、姉群も妹群も同じ結果で、「あきっぽい」「頑固」「気が散りやすい」の順であった。

これらの結果から、長谷川らは、「自己認知においては、姉妹のきょうだい位置による性格の差はみられないと言ってもよいのではないか」と言っている。

また、長谷川らの研究結果を同一方法で確認しようとした橋本みゆき・松本いづみ・蓑口佳枝¹⁴⁾の研究については、IIの4の説明がそっくりここでもあてはまる。

V YG 性格検査結果による性格特徴の把握

1. 末岡らの研究結果

末岡一伯²⁰⁾は、1981年発行の著書の中で、出生順位によるきょうだい間の性格特徴について、実験的調査の結果を紹介している。北海道教育大学旭川校の末岡が指導する小ゼミグループは、小学5年生から中学3年生までの男女児童・生徒を対象にYG性格検査を実施した（実施年は不明）。分析の対象としたのは2人きょうだいの結果で、兄群（長子・男子）21名、姉群（長子・女子）20名、弟群（次子・上が兄の場合）26名、妹群（次子・上が姉の場合）23名、合計90名についてである。12因子（尺度）について、各群ごとに平均得点を求め、各群・因子ごとに検定を行い、有意差の有無を検討した。

その結果、有意差が認められたのは、次の場合である。

- ① 長子群（兄群＋姉群）と次子群（弟群＋妹群）との比較では、N（神経質）因子だけに有意差が認められた。すなわち、神経質傾向は、長子群のほうが次子群よりも高い。
- ② 兄群と姉群との比較では、S（社会的外向）因子だけに有意差が認められた。すなわち、社会的外向性は、兄群のほうが姉群よりも高い。
- ③ 兄群と弟群との比較では、T（思考的外向）因子だけに有意差が認められた。すなわち、

思考的外向性は、兄群のほうが弟群よりも高い。

④ 兄群と妹群との比較では、D（抑うつ性）因子とI（劣等感）因子とCo（協調性）の3因子で有意差が認められた。すなわち、抑うつ性傾向も劣等感意識も協調性も、妹群のほうが兄群よりも高い。

⑤ 姉群と弟群との比較では、O（客観性がないこと）因子とS（社会的外向）因子の2因子で有意差が認められた。すなわち、主観的傾向も社会的外向性も、弟群のほうが姉群よりも高い。

⑥ 姉群と妹群との比較では、S（社会的外向）因子だけに有意差が認められた。すなわち、社会的外向性は、姉群のほうが妹群よりも高い。

⑦ 弟群と妹群との比較では、I（劣等感）因子とN（神経質）因子の2因子で有意差が認められた。すなわち、劣等感意識も神経質傾向も、妹群のほうが弟群よりも高い。

2. 井上・東の研究結果

井上栄子・東洋一は、1992年、出生順位についての研究の成果を学会²¹⁾で発表している（論文による詳細な報告は1993年）。井上・東は、山口県下の二つの小学校の6年生の男女児童268名（有効回答数）を対象に、YG性格検査（児童用）などを実施した（実施年は不明）。一人っ子（14名）を除き、対象者を長子（男子48名、女子54名）と次子以下（男子73名、女子79名）とに分けて、男女別に2群のYG性格検査の結果を比較した。

その結果、長子群と次子以下群との間に有意な差が認められたのは、男子群では1尺度（R尺度）だけで、女子群では一つもなかった。R尺度は「のんかさ」を表す尺度で、次子以下の者は長子よりものんきであること、つまり、気軽であり、衝動性が高いことを意味する。

また、井上栄子⁴⁾は、1995年にも、出生順位についての別の研究成果を学会で発表している。井上は、宇部市の二つの小学校の6年生の男女児童224名（有効回答数）を対象に、YG性格検査（児童用）などを実施した（実施年は不明）。分析対象者を2人きょうだいに限定し、長男群（26名）、次男群（23名）、長女群（16名）、次女群（27名）の4群に分け、さらにきょうだいの性別で分けて、2群間のYG性格検査の結果を比較した。

その結果、次のように要約できる。弟がいる長男と妹がいる長男とでは、有意な差が認められた尺度はまったくなかった。兄のいる次男と姉のいる次男とでは、Ag（攻撃的）尺度だけで有意差が認められ、前者のほうが攻撃的である。弟のいる長女と妹のいる長女とでは、Ag（攻撃的）尺度だけで有意差が認められ、前者のほうが攻撃的である。また、兄のいる次女と姉のいる次女とでは、A（支配的）尺度だけで有意差が認められ、前者のほうが支配的である。

3. 白佐の研究結果

白佐俊憲¹⁾（筆者）は、女子短大生を対象に、1989年と1992年の2回、別々の対象者にYG性格検査を実施し、きょうだい関係によって結果に違いがあるかどうかを、いくつかの観点から調べた。対象者数（有効数）は、1989年調査が909名、1992年調査が836名であった。対象者の内訳は、1989年調査が長子44.0%、中間子10.5%、末っ子38.7%、一人っ子6.8%であり、1992

年調査が長子41.7%，中間子9.8%，末っ子39.6%，一人っ子8.9%であった。

そして、性格類型（5類型）の分布及び下位12個尺度別標準点（5段階）の分布がきょうだい関係によって異なるかどうかを検討した。これらの分布差の統計的な有意性は χ^2 検定で確認した。

その結果、長子・中間子・末っ子・一人っ子に分けた出生位置（一般的には「出生順位」という用語が使われている）別の検討では、性格5類型の分布は、2回の調査結果とも有意な差が認められなかった。また、2回の結果には、一貫した傾向も認められなかった。より厳密な条件で検討するために、二人っ子のみ、三人っ子のみについて別々に整理して検討してみたが、同様に意味のある差異は認められなかった。

また、12尺度の分布についても比較・検討してみたが、有意差が認められたのは、全体においては1尺度（R尺度＝のんきさ）、二人っ子においてはまったくなく、三人っ子においては2尺度（D尺度＝抑うつ性、N尺度＝神経質）であった。これも、2回のうちのいずれか1回の調査で認められただけである。

同様な検討を、きょうだい数別、出生順位別、性別構成別に分けて行なったが、やはり意味のある差異はほとんど認められなかった。

前記の2研究の結果と比較してみても、対象者の発達段階や結果の整理方法の違いにもよるわけであるが、一貫した傾向が認められたとは言いがたい。

VI ま と め

以上、長子（兄姉）的性格特性と次子（弟妹）的性格特性、あるいは長子（兄姉）的性格・行動特徴と次子（弟妹）的性格・行動特徴をとらえようとした主要な研究結果を概観してみた。対象者の発達段階の違いや研究方法の違いもあって、結果的には、出生順位の影響と思われる差異も一致点もあまり見いだされていない。特に、きょうだいを意識させないで、自己判断・自己評定を求めた研究ではそうである。ある程度的一致が認められたのは、きょうだい同士が比較し合って相対的立場で回答する方法によった研究である。この方法では、2者択一的にどちらかに決めようとする心理が働き、実際以上に差異を鮮明化した回答になっているのではないかとも思われる。これらの解明は、今後の研究を待たなければならない。

いずれにせよ、全体として研究数自体が少ない上に、方法的に不備な研究も少なくない。交差妥当性を確認している研究もほとんどない。今後は、さらに詳細に分析するために、出生順位だけでなく、きょうだいの人数・年齢間隔・性別構成も同時に考慮した研究が望まれる。

文 献

- 1) 白佐俊憲：きょうだい関係と性格—— 1. YG性格検査による検討——，北海道女子短期大学研究紀要，29号，1～16，1993.
- 2) 白佐俊憲：きょうだい関係と性格—— 2. 自己評定による検討——，北海道女子短期大学研究

- 紀要, 30号, 1~15, 1994.
- 3) 東 洋一・井上栄子：出生順位についての研究, 宇部短期大学学術報告, 30号, 39~44, 1993.
 - 4) 井上栄子：出生順位についての研究Ⅱ, 日本保育学会第48回大会研究論文集, 50~51, 1995.
 - 5) 岩井勇児：2人きょうだいの出生順位と性格(続報)——長子的性格・次子的性格への疑問——, 愛知教育大学研究報告, 44輯(教育科学編), 91~100, 1995.
 - 6) 依田 明・深津千賀子：出生順位と性格, 教育心理学研究, 11巻4号, 47~54, 1963.
 - 7) 深津千賀子・依田 明：きょうだいの位置と性格, 日本教育心理学会第5回総会発表論文集, 1963.
 - 8) 三木安正・木村幸子：兄的性格と弟的性格——双生児研究その一——, 教育心理学研究, 2巻2号, 1~10, 1954.
 - 9) 三木安正・天羽幸子：双生児にみられる兄弟的性格差異と家庭での取扱い方——双生児研究その二——, 教育心理学研究, 2巻3号, 13~21, 1954.
 - 10) 依田 明・飯嶋一恵：出生順位と性格, 横浜国立大学教育紀要, 21集, 117~127, 1981.
 - 11) 依田 明・飯嶋一恵：出生順位と性格, 家庭教育研究所紀要, 2号, 23~29, 1981.
 - 12) 浜崎信行・依田 明：出生順位と性格(2)——3人きょうだいの場合——, 横浜国立大学教育紀要, 25集, 187~196, 1985.
 - 13) 長谷川さくら・堀籠千秋・保川麻紀：兄弟関係が性格形成に及ぼす影響, 札幌大谷短期大学保育研究, 30集, 272~280, 1992.
 - 14) 橋本みゆき・松本いづみ・蓑口佳枝：兄弟関係が性格形成に及ぼす影響——自分自身による評価と他人による評価との違い——, 札幌大谷短期大学保育研究, 32集, 246~262, 1994.
 - 15) 岩井勇児・松井直美：2人きょうだいの出生順位と性格——兄弟・兄妹・姉弟・姉妹による違い——, 愛知教育大学研究報告, 42輯(教育科学編), 41~53, 1993.
 - 16) 岩井勇児：2人きょうだいの出生順位と性格——性差(兄弟, 兄妹, 姉弟, 姉妹)の検討——, 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 170, 1992.
 - 17) 岩井勇児：長子的性格・次子的性格への疑問——きょうだい間の回答の不一致からの検討——, 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 190, 1994.
 - 18) 詫摩武俊：きょうだいと性格, 国土社, 48~52, 1970. (詫摩武俊：ふたりっ子の時代, 121~125, 1981.)
 - 19) 詫摩武俊：きょうだいと性格, 国土社, 53~55, 1970. (詫摩武俊：ふたりっ子の時代, 125~127, 1981.)
 - 20) 末岡一伯：子どもの人格発達ときょうだい関係, 子どもの発達と教育改革(西 勇・小田切 正編, 北海道大学図書刊行会) 100~129, 1981.
 - 21) 井上栄子・東 洋一：出生順位についての研究, 日本保育学会第45回大会研究論文集, 44~45, 1992.